

都市と地域の農をつなぐ夏の挑戦

～地域農業の発展と、それを支える道の駅の取り組み～



一般財団法人中央市農業振興公社（河野侯光理事長 中央市大鳥居）は、平成14年の設立以来、「都市と農村の交流促進」を使命に農業体験イベントや技術習得研修を通じて農業の魅力を市内外に伝えてきた。

今年度も、市民を対象にした「野菜栽培営農講座」を実施。専用トレイ「セルトレイ」でキャベツやブロッコリー、カリフラワー、アレッタなどの播種から育苗までを体験し、病害虫防除や生育管理技術を学んだ。また、地域の担い手農業者を対象とした「野菜・果樹・花卉栽培講習」も行われ、新技術や新品種の特性理解を通じて、産地維持・発展に不可欠な学びの場を提供している。こうした取り組みは、安全・安心な農産物生産を支える基盤となっている。

公社が運営する「道の駅とよとみ（中央市浅利）」では、旬の農産物を活かしたイベントが好評を博した。



営農講座により、生産者の技術向上に努めている

6月の「とうもろこしフェア」ではゴールドドラッシュ種が軽トラックで大量に搬入されたものの、開店直後に完売する盛況ぶり。7月の「桃フェア」では中央市産の桃が店頭を彩り、多くの来場者を魅了した。このほか、朝採りの新鮮野菜や桃・すもも・ぶどう・キウイの果物、さらに加工室で作られるソーセージやハム、シルクパウダー入りソフトクリームなど、多彩な商品が並び、地域の魅力を広く発信している。特に夏のフェアは、特産品の価値向上や農業者の所得向上に加え、中央市と都市住民との交流促進にも寄与している。

これらの取り組みは、地域資源を最大限に活かした「資源循環型農業」モデルとして評価されている。河野理事長は「今後とも豊かな農業資源を活用し、市内農業者の所得向上や都市・農村交流の結節点として努めていきたい」と述べ、公社の事業推進への決意を示した。



美味しい桃を求めて行列ができる盛況ぶり（道の駅とよとみ）